
君に届く神の唄

choro

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君に届く神の唄

【Nコード】

N63210

【作者名】

choro

【あらすじ】

忘れ去られようとしていた神・蓮。神を見つけた少女・唯那。少女を繋ぐ少年・健太。ひとりの神とふたりの人の想いが交差する。唯那は父の転勤で来た町で、【細道】を見つけた。そして、その先にいた天神・蓮に出会う。しかし、出会いは終わりへの始まりだった……。作中には通リゃんせの歌詞が登場しますが、私の解釈です。実際のものとは異なると思います。それでもいいという方のみお読みください。

第一話（前書き）

私のHP「Choroの遊び場」からの転載です。そちらですでお読みの方は、区切りは変わっていますが、内容変わりませんので、ご了承ください。

第一話

—— 通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどここの細道じゃ

天神様の細道じゃ

ちよいと通してくださいゃんせ

御用のないもの通しやせぬ

——

—— 行きはよいよい

だつてあなたに会えるから

——

—— 帰りはこわい

だつてあなたとさよならだから

——

春休みに両親の転勤で天？町に越してきた忍谷唯那は、新しい町をよく知ろうと散歩がてら一人、探検していた。

唯那は今春から高校1年になる。

引越しのタイミングとしてはよかったなと唯那は思う。

小学校・中学校の友達と離れるのは悲しかったが、いずれにしても高校はみんなバラバラだ。

どうせ新しい友達を作らなければならないなら、ここでも一緒だった。

だから、引越しと聞いてもそんなに抵抗は無く、これからの高校生活を楽しみにしていた唯那だった。

天？町は、それほど大きくはない町だ。
今では失われつつあるという、ご近所づきあいというものがあるという。

そのおかげか町にはどこかのんびりとした空気が漂っていた。
とはいっても、人口はそれなりにいる。

大通りには多くの車が走りかっているし、裏路地といわれるような場所でも、ちらほらと人影があった。

まだ、それほど面識はないが、唯那をみかけると「こんにちは」「いい天気ね」などと声がかかった。
その挨拶に唯那の心は暖かくなる。

（今日の天気みたい）
春独特のふんわりした日差し、ぬけるような青い空。
だから、唯那は町の隅々まで歩き回った。

唯那がその小道を見つけたのは偶然か、それとも必然だったのか。
その道は人が2人通れるくらいの小さなもの。
道と呼べるものではない。

それでも、それは確かに【道】だった。
【細道】だった。

周囲には民家があるにも関わらず、その【道】には人の気配はおろか、野良猫の類の気配さえなかった。

そのことを少しだけ不思議に思ったが、唯那の好奇心のほうが強かった。

いや、惹かれたといったほうが、正しいかもしれない。
道の先にかすかに見える小さな鳥居。

（何かが祭られているのかも）
惹き寄せられるように唯那はその【細道】に足を踏み入れた。

しん――

なにも音が無い。かに思われた。

通りゃんせ 通りゃんせ

声が響いた。

澄んだ高い声、幼子の声。
声は続ける。

ここはどここの細道じゃ

天神様の細道じゃ

ちよいと通してくだしゃんせ
御用のないもの通しやせぬ

ヒュウ と風が通り抜けた。

お前は？

今度は成人男性の声が誰何する様に尋ねた。

「忍谷唯那です。」

唯那は問われるままに答えた。

何をしに来た？

「あなたに、会うために。」

言葉が口から紡ぎだされた。

まるで、用意されていたかのように。

そうか。

再び、ヒュウ　と風が吹いた。
・・・景色が、変わっていた。

きれい・・・。

ただ、そう思った。

真っ赤な鳥居、真っ赤な本殿。ぐるりと囲む水の鏡・・・。

ひらひらと、満開の桜が散っている。

唯那はただ、その光景に見惚れた。

道の先に視えていたのは、ほんとに小さな鳥居だった。石造りの鳥居だった。

だが、今、目の前にあるのは、大きな鳥居。真っ赤な木造の鳥居。本殿を囲む池に、周りの風景が映し出されて、まるでもう一つ神社が存在するかのようだった。

「いらつしゃい。」

惚けていた唯那の耳に静かな男の声がかかった。

声のしたほうに目を向けると、綺麗な人がたたずんでいた。二匹の犬を従えて。

透きとおるような白い肌に、銀に光る髪をなびかせてその人はそこにいた。

唯那は目を離すことが出来なかった。

この美しい場所に相応しい、厳かな雰囲気を持った人だった。

唯那から声を掛けることは許されない気がした。

「あなたが、唯那ですか？」

声を発することが出来ず、唯那はコクリと頷いた。

唯那の肯定を受け取ったその人は、うれしそうに微笑んだ。

「あなたを待っていました。」

「あ、あなたは？」

唯那は恐る恐る口を開いた。一番の疑問だ。

「わたしは天神。名は蓮と申します。こちらの白い毛の子がマコ、黒い毛がコマ。わたしの守犬です。」

二匹の犬が交互に口を開いて、蓮の言葉を肯定する。

「我はマコ。よろしくお願いします。」「私はコマ。よろしく。」

二匹が喋ったので、唯那は驚く。そして、「あっ」と声をあげた。

「唄・・・問い・・・」

「はい、唄は我が。」

マコが澄んだ高い声で答える。

「そして、私が問うた。」

低い声で、コマが言った。

唯那は本殿へ通された。

「うわぁ・・・」

本殿の中はたった今出来上がったばかりのような輝きを放っていた。知らずに感嘆の声が漏れた。

そんな唯那のようすに蓮は目を細めた。

あ、感心してる場合じゃなかった。はたと唯那は思い出す。

「あの、ここはどこなんですか？」

本当に一瞬で視界が変わってしまったのだ。

ただ、唯那が先ほどまでいた世界と違うことだけは確かだった。

明らかに空気が違う。この地の空気はどこまでも澄み切っていた。

「ここは、あなたが目指していた場所ですよ。石造りの小さな社。それが本来人々に見えている姿です。」

そして、それに重なる神界が、今、視えている世界です。

最初の言葉は唯那には理解できなかったが、ここが神界だということとは分かった。

さつき、この蓮という人は天神と名乗っていた。つまり・・・

「ここは、あなたの住む世界・・・。」

「はい。私が統治する世界です。」

（つまり、私は今、神と話しているわけで・・・）

だけど、あまり異世界に来てしまったという実感は湧かない。怖さや不安といったものも唯那は感じていなかった。

「えっと、じゃあ・・・。」

唯那が、次の質問を発しようとしたところ、さえぎる声が掛かった。

「続きはお茶でも飲みながら。」

そう言いながら、マコが運んできたお茶は薄いさくら色の飲み物だった。

「桜の花びらを溶かしたもののですよ。」

蓮が説明を加える。

その言葉を聞いて、唯那は異世界に来てしまったことを実感した。

それから、西の空が赤く染まるまで、唯那はのんびりとした時間をそこで過ごした。

「あ、そろそろ帰らないと。」

唯那はつぶやいた。

「え・・・？」

蓮はその言葉に意外だというような複雑な表情をした。

そして、「もう帰らなくていいのではないか？」と言う。

唯那もこの場所はとても居心地が良くて、出来ることならもっと居たいと感じていた。

しかし、

「だって、家に帰らないと心配するわ。」

蓮に唯那がもつとも一般的だと思われる説明をする。

すると、蓮はもっと複雑な表情をして何かを考える素振りを見せたが、ひとつ頷くと、

「では、また来てくださいね。」

と、美しい微笑を湛えて言った。

唯那は、なぜ蓮がそんなに意外に思うのか、不思議に感じたが、

「はい、また遊びに来たいです。」
と答えた。

「鳥居を抜ければ元の道に戻りますから。では。」
「はい。さようなら。」

唯那は言われたとおり、鳥居へと向かって歩く。
一歩踏み出すことにはつきりとは分らないが、かすかな不安を感じた。

その気持ちに気づくのはもう少し先のこと・・・。

第二話

今日は高校の入学式だ。

唯那は真新しい制服に身を通して、入学式に臨んだ。

天？町には高校がひとつある。それが、これから唯那が通うことになる天？高校だ。

天？町に住む人はほとんどこの高校に進学するらしい。とはいっても、天？町民だけでは、人数が足りないので、唯那のような外から来た人もいる。

ほとんどがこの町出身だと聞いて、唯那は少し不安に思った。友達、出来るだろうか？

式は退屈だ。

唯那は先日自分の身に起こった不思議な出来事に思いをはせた。あれは本当のことだったのだろうか？家に帰ってから何度も自答した問いだ。

美しい場所だった。

その地の住人、天神・蓮。綺麗な人だった。

その面差しが心の一点に張り付いて離れない。

入学式があつたため、帰らなくてはならなかったが、叶うものなら一生あの場所で暮らしたいと思った。

かの人は「またおいで」と言った。

また行つてよいのだろうか？

今日の帰りに寄ってみようかと唯那は思った。

これといった面白みも無いまま、入学式は無事に終わり、唯那は張り出されていた自分のクラス、1 - Bに向かった。

教室のドアを開けると、唯那が不安に思ったとおりの光景が広がっていた。

そう、みんなほとんどが顔見知りなのだ。
すでに、教室のあちらこちらで、話に花を咲かせている。
仲良くなれるだろうか？

結局、高校でもあまり代わり映えしないな。

そのことに多少の不満を覚えながら、カイ・ケンタ甲斐健太は教室のドアを開けた。

自分の席を確認する。窓際か。

結構いい席だと思いながら、自分の席へ向かう。

隣の席にはすでに女の子が着席していた。

心ここにあらずといった感じで、物思いにふけている。

ふっ、とその子が健太のほうを見た。

（あ、消えてしまう）

その瞳に見つめられた瞬間、そう感じた。

次を感じたのは自分が守ってあげなくてはこの強い使命感。

その瞬間にもう心は囚われていた。彼女に。

「俺は甲斐健太。君は？」

気づいたら、声を掛けていた。

「俺は甲斐健太。君は？」

誰かが自分のほうへ向かってくるのが視界の隅に移り、そちらへ目を向けた唯那は突然声を掛けられて驚いた。

初対面ならではの軽い笑みを浮かべてその男の子は隣の席に腰掛けた。

隣の席の人かとぼんやりと思う。

「ん？」と名前を促されていることに気づく。

「忍谷唯那です。」

「忍谷唯那さんか。あ、名前呼び捨てでいい？みんな呼び捨てだからさ。俺も名前で呼んでよ。」

彼はそういうと今度は人懐っこい笑みをその顔に浮かべた。

なんだか仲良くなれそうだと唯那は思った。

「あ、健太〜！」

声がしたかと思うと、その声のとおり、活発そうな女の子が駆け寄ってきた。

「健太も同じクラスだったんだ。も〜いい加減飽きたわ。」

とちよつと首をすくめて言う。

でも、言葉の割には楽しそうだと唯那は感じた。

「俺だつてごめんだよ！」

そう返す健太も、気心の知れた仲間に対する笑顔だ。

「まあいいわ。それより、なあに？もう目当ての子を見つけたの？」とチラリと唯那に視線を向けてその子は言った。

唯那は思いがけない言葉に目をパチパチとさせた。

「ばかつ、そんなんじゃないよ！」

と言いつつも健太の顔は少し赤く染まっていた。

「ふ〜ん。」

意味深な呟きを健太に残すとその子は唯那の方にくるつと振り向いた。

短くそろえた髪が良く似合っている。

「あたし、甲斐千由紀。こいつのいとこなの。よろしくね！」

「あ、忍谷唯那です！」

「よろしく、唯那！」

勢いに飲まれて唯那も答えると、千由紀は明るく笑った。

放課後、唯那はひとり、あの細道へ向かった。

やはり周囲に人影は無かった。

神の坐す所だから、なにかの力が働いているのかもしれないと、唯那は思った。

足を踏み入れると、あの唄が聞こえた。それに続く問い。

唯那はもうその声が守犬であるコマとマコだと知っていたので、

「こんにちは。唯那です。」

と、自分の訪問を告げた。

瞬間ざつと視界が変わる。唯那はうれしそうなコマとマコに迎えられていた。

正直、不安だったのだ。夢だったのではないかと。そうでなければ、まやかしだったのではないかと。

現実ではとても信じられないようなことだったのだ。自分が違う世界に入ってしまったことが。

だが、今日また唯那はこの世界に迎えられた。これは現実なのだ。

「唯那さんをお連れしました。」

唯那は蓮の元まで案内された。

「こんにちは。」

そう挨拶して、唯那は蓮を見た。

何かに打たれたような表情をしていた。それはすぐ見えなくなったが、唯那は不安になった。

来てしまっではいけなかったのだろうか、蓮には歓迎されていないのではないか。

唯那の顔が曇ったのが分かったのか蓮は言う。

「やあ、唯那。よく来てくれましたね。」

その言葉にほつとする。

よかった。嫌われてはいないみたい。

自分で思っている以上にほつとしていた。蓮に嫌われるのはとても怖かった。それは、蓮が神だから、その怒りを畏れてとかそういうことじゃない。蓮に嫌われなくなかった。

それからというものの、唯那は週に一度は必ず、多いときは4、5日、蓮のところへ通うようになった。

おしゃべりをして帰るだけ。それだけのことなのに楽しくて、うれしくて。

そうして楽しいときが終わり、帰るのはとても怖いのだ。楽しく、うれしく思えば思うほど、帰りが辛い。それに拍車を掛けるのは、寂しそうな蓮の顔。

だけど、唯那は帰らなければならない。どうしても自分の世界へ帰らなければならないのだ。

自覚の無いまま唯那の心は囚われる。
この不思議な世界に。

——蓮という存在に……。

楽しいときが終わるのは早い。

唯那は通う。一瞬も無駄にはできないとでもいう様に。
ただひたすら、唯那は、蓮に、逢いに行く。

時が限られていることを唯那は、……知らない。
いつかは終わりが来ることを。

第三話（前書き）

蓮視点。短めです。

第三話

再度この地にやってきた唯那を視て、蓮ははっとした。

唯那を守るようにその周りを囲む強い想い。

その想いは唯那をあちらの世界、唯那の世界へ戻す足がかりとなっていた。

そうか、唯那は違ったのだ。

合点がいった。

なぜ、先の訪問の際、唯那は帰ろうとしたのか、そして帰れたのか。

唯那は違うのだ。

かつて、この地へ送られてきた少女たちとは。

蓮への捧げものとしてやってきた少女たちとは違ったのだ。

何人の少女たちが蓮の元へやって来ただろうか。

はるか昔、まだ人々の間で神が感じられていた頃からそれは行われていた。

すなわち、神への捧げもの。

少女たちはみな選ばれて、蓮の元へ来るべくしてやって来た。

そうして、残りの人生をこの世界で過ごした。

彼女たちは元の世界へ帰る必要などなかったのだ。

最後の少女が来たのはいつだったろう。

慣習はいつしか薄れ、蓮への捧げものはなくなって久しかった。

100年以上もの間、蓮への捧げものはなかった。

だが、古から今のままの姿を保つ蓮にとって、100年という時間の単位はほんの一瞬のことではない。

けれど、寂しさを感じ始めていたのは確かだ。

人々の心から神という存在が姿を消していくのをただ眺めているこ

としか、蓮には出来なかった。

ある日、社のすぐ近くに人の気配を感じた。

蓮は「おや？」と思う。

ここ最近は本当に人の出入りは皆無だったからである。

数人で何か話しているようだった。

耳を澄ます。

ああ、ついにこの日が来たのかと蓮は思った。

蓮は同じように忘れ去られていった同族の話を風の便りに聞いていたのである。

終わりが近づいたのを蓮は感じていた。

そうして、あの春独特の温かな日。

終わりを予感したように静かだった桜が、いつせいに花開いたのだ。

そして、いぶかしむ蓮の元へと唯那はやって来た。

彼女が最後の捧げものとなるのだろう。

このときは、まだ唯那のことを人々の心にわずかに残る神への、蓮への最後の贈り物と思っていたのだ。

唯那が捧げものではない――。

ではなぜ、唯那はここへ来れたのだろうか？

その答えは唯那自身が、彼女自身の力だけで見つけたからに他ならない。

唯那は蓮を見つけてくれた。

人々の心から永遠に忘れ去られようとしていた蓮を。

愛しい。

心の底から湧き上がってくる感情。

この少女を誰よりも愛しく想った。

口惜しい。

逢瀬のたびに彼女の世界へ帰さなくてはならないことが。

彼は知っている。

逢瀬の時間が限られていることを。

自らの手元へ置いておくことが出来ないことを。

留めておきたい。彼の元へ。

しかし、想いの糸が邪魔をする。

その想いは、唯那が自分の世界を忘れないようにしっかりと結ばれていた。

第四話

唯那に抱いた消え入りそうな雰囲気は、日を重ねるごとに強くなっていた。

そんな健太の心配をよそに、今日も唯那は千由紀らと共に明るく過ごしている。

本人は気付いてないのだろう。自分の持つ不安定さに。

目を離れた隙に、健太たちではたどり着けない、違う世界へ行ってしまうような危うさを持つことに。

『違う世界』

健太の思考の片隅に、その言葉はひどく印象に残った。

同時に思い出すのは、健太の祖母がよく話してくれた昔話。この町に伝わる話だ。

「この町は天神様が守ってくれているんだよ。」

「天神様は、ほら、お前も何度か通ったろう？あそこの細い道の先に、石造りの鳥居と社があつてね。そこにいらっしゃるのだよ。」

「昔は、そうだねえ、まだおばあちゃんの母さんも生まれてないくらい前かね。天神様に贈り物をしていたそうだよ。天神様が一人で寂しくないようにね。若い女子、14〜18くらいの間かね。ん？何でその歳の子なのかって？天神様は神様だからね。歳はとらないからお若いお姿なのだよ。だから、ちょうどつり合うような子を選んでいただろうね。天神様の元へ行けるのは名誉なことだったというよ。おばあちゃんはもちろんその儀式を見たことはないけどね

え。おばあちゃんの母さんから聞いた話だよ。」

祖母の優しい声で、記憶が呼び起こされる。何度も何度も繰り返して話してとせがんだ。

その場所はどこだったろうか。なにせ、小さい頃に聞いた話だ。健太の記憶は曖昧だった。

ちょうど今の俺たちくらいの子だったんだなとぼんやり考える健太の耳に、唯那たちの会話が引っかかった。

「んも〜！唯那ったらまたなの？」

「だって、寄るところがあるんだもん！」

「そう！それよ！いつもいつも私の誘いを断って、どこに行ってるの？」

「え・・・っと。」

言葉をにこす唯那に、千由紀は返事を貰うまで放さないようだ。

「答えられるわよね〜？」

千由紀の追及は恐ろしかったらしい。

「は、はいっ！」

唯那は勢い込んで返事をした。

「え、えっと〜、千由紀ちゃんは天神通りの脇にある細い道知ってる？」

「細い道？そんなのあったっけ？」

「ふたりくらいが通れるくらいの細い道なんだけどね、先に行くと小さな社があるの。」

「ふ〜ん。」

唯那の説明を聞いても千由紀にはピンと来ないようだった。本当に

知らないのだろう。

まあ、あんなに細い道なんだからいくら地元とはいっても知らないのは当然か。

大して気にも留めず、唯那は説明を続ける。

「で、その社に行ってるの。」

「うん。で?」

「『で?』って?」

「だ〜から、何をしに行ってるかってことよ。」

「あ、うん。」

唯那は少し不安になった。本当のこと、蓮のいる神界のことを言ったら千由紀は信じてくれるだろうか? きっと信じてくれないだろう。私だってそんなこと友達から言われたって信じられないもの。

「えと、お、お参り?」

「はあ〜? そんなもののために私との約束断ってたのっ!」

どうやらお参りだという唯那の言葉を信じてくれたらしい。深く突っ込まれないのはありがたい。しかし、千由紀の怒りを買ってしまったようだ。

「今日は、いや、一週間! 付き合ってもらいますからね!」

問答無用で、引っ張っていかれるようだ。

唯那は心の中で「ごめん。」と蓮に謝った。

天神通りの脇の細道?

そうだ。確か祖母は言っていたではないか。

『天神様の前を走る道だからこの道は天神通りと呼ぶんだよ』

さつきはお参りなんて言ってたけど、本当だろうか?

もしかしたら・・・。

なんて、あるわけ無いよな。

自分で否定してみるが、すっかりしない。直接本当のことを唯那に聞いてみよう。

だけど、千由紀に解放された唯那を問い詰めたとき、本当に唯那の身にそんなことが起こっていたなんて、違う世界があるなんて信じられなかった。

健太はそこにいた。

まさか、ほんとに、こんなことが、あるなんて。

唯那はそう簡単には本当のことを言わなかった。

そりゃ、そうだよなと健太は思う。

健太だって信じられないことなのだ。

だけど、嘘だと決め付けてしまうには、祖母の話は現実感を伴っていて。

健太は自分から言った。

「天神様のところだろ？」と。

その一言に、唯那は一瞬驚愕し、そして話した。

イライラする。

唯那の話を聞けば聞くほど、どれだけ唯那が蓮に魅せられているのかが分かって、向こうの世界に執着心を持ち始めていることに気づいて。

次に向こうへ行ったら、二度と帰ってこないんじゃないかって。

それは、嫌だ。

唯那が俺のそばからいなくなるのは嫌だ。
笑いかけるときのふわっとした笑顔とか、千由紀たちとはしゃぐ姿とか。

それがなくなるのは、嫌だ。唯那の笑顔が、笑い声が、なくなるのは嫌だ。

そうして、やっと、健太は気付いた。

なぜ、唯那の笑顔を追ってしまうのか。初めて会ったときに守りたいと思ってしまったのか。

そう答えは簡単。・・・唯那が好きだ。

贈り物として捧げられた彼女たちは、あちらへ行っただけ、一人として帰ってくる者は無かったという。

初めて会ったときから感じている、消えそうな唯那の気配。合点がいった。

唯那はすでにあちらの世界に取り込まれ始めているんだ。

嫉妬と不安。ふたつの気持ちが健太の心でせめぎ合い・・・。

「唯那、もう行くな。」

放った言葉は、思いがけずも冷たいものだった。

第五話

「もう行くな。」

初めて聞く、健太の冷たい声に、唯那の体はビクツとなった。

健太の言葉が心に突き刺さり、唯那は自分がとても悪いことをしているような気分になる。

「行くな。」

再びの声に、健太の顔を見上げると、それはとても心配そうで。

健太はただ、繰り返す。「行くな。」と。

それはとても強い静止力を持っていて……。

だけど……。

唯那は想う。

（蓮に会いたい）

くしゃりと唯那の顔がゆがむ。

健太が心配してくれるのを、うれしいと思う。
だけど、私は……。

唯那は健太を見上げ、懇願する。

「蓮に会いたい」と。

唯那の意思を曲げることが出来ない。
それならば。

「俺も連れて行ってくれ。」

健太は言った。

その細道は静かだった。大通りに面しているというのに、とても空気が澄んでいた。

ああ、そうだ。この場所だ。
健太は、一步足を踏み出す。

通りゃんせ 通りゃんせ

ここはどここの細道じゃ

天神様の細道じゃ

ちよいと通してくださいゃんせ

御用のないもの通しやせぬ

唄が響く。

ああ、唯那が言ったとおりだ。

「唯那です。・・・あの今日は・・・。」

唯那が何も無い空間に向かって呼びかける。

分かっております。さあ。

「!!」

直接、耳に響く声が唯那に伝えた。

そして、一筋、風が吹き抜ける。

・・・世界が変わった。

健太の目に飛び込んだのは、燃えるような赤だった。

温かい

健太の想像とは異なり、あったのは、・・・とても温かい世界だった。

「初めまして。」

そこにたたずむ一人の男が健太に言った。

この人が・・・蓮。

驚くほどの澄んだ気に、健太は気圧される。

天神か・・・。

「蓮っ、久しぶり！会いたかった。」

隣から弾んだ声が上がった。声の主を振り返る健太の目に映ったのは・・・、

唯那のはにかんだような、だけど満面の笑顔。

ズキンと健太の心は軋んだ。

（そうだ、こいつ千由紀に捕まって、しばらくここにきてないんだ。）

千由紀やクラスの友達、健太といるときとは違う。

健太の見たことの無い唯那がそこにいた。

それだけ会いたかったってことだよな・・・。

唯那の連に対する思い入れがどれだけ強いか思い知らされる。

自分の無力を思い知れされた気がして、健太はうつむいた。

唯那がしばらく来なかった。

久しぶりの気配に心が躍る。

しかし、そこにもう一つ気配があることに蓮は気付いた。

もしや……。

蓮はもう一人の客人を招きいれた。

ああ、やはり。

その者は健太と名乗り、そして、蓮が初めて迎え入れた、性を男とする者だった。

一目見た瞬間に、唯那がまとう想いの主だと悟った。

そして、想いの糸をたどるように唯那の心を覗き見たのだ。

「……！」

ああ、なんということだろう。いずれにしろ、時間はそれほど多くはないのだ……。

「少し、お話をしましょうか……？」

蓮は健太に声をかけた。

蓮と健太、ふたりで何を話しているのだろうか？

蓮がいなかったため、マコとコマが唯那の相手をしてくれている。

ふたりと話をしながら唯那は思う。

健太、彼は自分がここに来ることを良くは思っていない。

（あまり、蓮にきついこと言っていないといいんだけど……）

いつもは意識しないが、蓮は神なのだ。

もし、健太が蓮の怒りを買ってしまったら、どうなるのだろうか。

唯那は健太のことも大事だ。

高校で初めて出来た友達。

唯那がここに連れてきたせいで、彼を失うことになったら……。

（何事ありませんように）
唯那は静かに祈った。

唯那に話を聞かれたくないという思いから、蓮は彼女のいる部屋から随分と離れた場所まで、健太を案内した。そうして、改めて切り出す。

「初めまして、私はこの地に住まう天神・蓮と申します。あなたと少し話をしたいと思ひまして、この地に招きました。先に申し上げますと、この地に参られた男性は、健太殿が初めてです。」

しかし、疑問が残る。蓮が道を開いたとしても、健太側にそれを通る力がなければ来られないはずである。

「ときに健太殿。ここに来る際に唄は聞こえましたか？」

蓮の唄は道標。ここに来るための道標。

道標を聞くための条件は、『知っている』こと。

あの唄のことかと思い、健太は「はい。」と答えた。

「そうですか、あなたは私を『知っている』のですね・・・？」

第六話

「あなたは私を『知っている』のですね。」

蓮はそう言ったが、健太には何だか分からない。健太は今、初めて蓮に会ったはずである。

健太が怪訝な顔を見ると、蓮は続けた。

「つまり、健太殿は、『私に関する話』、いわゆるところの伝承とかいった類のものです。それを伝え聞いている。違いますか？」
祖母の言っていたあの話のことだろうか。

「ああ・・・、確かに、祖母から昔の話を聞いたことがあります。」

「やはり。だから唯那の話を信じて、ここまでやって来た。あなたはこの地があることを、私が居ることを『知っている』から、入れたのです。普通、私にとっては悲しいことですが、今の時代の方々は、私の存在を忘れてしまっています。知らなければ、存在しないのと同じこと。見えることも触れることもない。あなたは、健太殿は、稀な人です。」

だから、唯那の心を結べた。『知っている』から出来たこと。

皮肉なことに、蓮にとっては、健太もまた自分を覚えていてくれる、特別な存在なのだ。

だが、唯那との時間はさらに大切。蓮は、ひとつ頭を振ると気持ち^{かぶり}を切り替え、言葉を紡ぐ。あとわずかの唯那との逢瀬の許しを得るための・・・。

「さて、では本題、唯那のことについて話しましょうか・・・？」

。。
そうだ、弱気になってはダメだ。唯那を連れ帰らないと。だけど・・・。

「唯那を帰してください。」

単刀直入に健太は言った。

「やはりそうきますか。ですが、あと少し、あと少しだけお願いします。」

蓮は懇願する。だが、健太とて、このまま唯那が消えてしまうのを見過ごすわけにはいかないのだ。

「祖母の話では、こちらへ来た子に帰った者はなかったと、聞いています。あと少しとは、どういう意味でしょう？」

このままこちらへ行き続け、唯那だけが取り込まれない保証がどこにあるのか。

健太の言葉にならない疑問を感じ取り、蓮は言う。

「唯那は、過去の人とは違うのです。いつでもあの子が望みさえすれば、帰ることが出来るのです。」

「唯那には、あなたの想いが掛っています。目には見えない想いの糸です。それは唯那がそちらの、あなた方の世界へと戻っていくための足掛かりとなっています。」

蓮はひと呼吸おくと、

「つまり、健太殿が唯那を想う限り、唯那がこの地に『留まり続けること』は、ないので。」

しかし・・・、と心の中で蓮は思う。

蓮の存在に焦がれることは、すなわち、唯那の心がこちらの世界に染まるということ。

蓮は気付いてしまった。

唯那の心が、すでに染まりつつあることを。

心が染まる。ここは神の世界。それは神の心になるということ。人の身で、それに耐えることが出来ようか？このまま染まり続ければ、いずれ唯那は心を壊す。唯那ではなくなってしまうだろう。

健太には告げることはできない。そして、もう一つ。蓮が本気で臨

めば、唯那に掛かる糸を断ち切れることも。告げれば、この者はきつと唯那を連れて帰ってしまう。

そうして、二度とこちらへは来させないだろう。

これは我儘だ。

「唯那をこちらの世界に引き込むつもりはありません。私の力の限り、全力で帰しますから・・・だから、どうか唯那との逢瀬を。いまひと時の逢瀬を、許して下さい。」

唯那が『唯那』でなくなってしまうては意味がない。それはもう、蓮の焦がれる唯那ではないのだから。だから、唯那を帰すのだ。言の葉に想いを乗せて、蓮は健太へ許しを請う。

蓮が健太に頭を下げる。

もつと冷たい世界だと思つてた。

そこには天神という名の鬼がいるのだと。

魂をじわりじわりと侵食し、喰ってしまうのだと、だから、誰も帰つてこなかったのだと。

だが、そこにいるのは紛れもなく神の一員。この地が澄んでいることがその証拠。

そして・・・

なにより、健太の感覚が告げる。ここは唯那に害を及ぼす世界ではないと。

だから健太は気付かない。人であつたがゆえに。唯那の心を見ることが出来ないゆえ・・・。唯那の心の不安定さを見逃す。

健太が想い描くのは唯那の笑顔。ここに来て、蓮に会った瞬間の幸せそうな笑顔。

悔しい。健太が教室で笑わせたときとは、全く別の表情。

出来ることなら、自分に向けて笑って欲しい。だけど・・・、きつと健太ではダメなのだ。

唯那に初めて会ったとき、何を思った？守りたいと想ったのではなかったか。

守る――。

それは、唯那の体を守ることなのか？

違うだろう。健太は想う。

唯那の心を守ること。それは、唯那が幸せであること、ではないのか。唯那の幸せを望むことが、本当の意味での『守る』ことではないか。

再び、健太は蓮を見据える。

その姿は本当に苦しそうで、そして、言葉の裏にある気持ちを健太は感じ取る。

ああ、きつと唯那をここへ留めることなど、本当は簡単なことなんだ。

だけでも、蓮はそれをしない。それは、唯那が普通の生活を送ることを望んでいるからではないか。

そんな蓮の真摯な想いに答えるべく、健太は口を開く。

「分かりました。本当にあと少し、なのですね？」

それは、了承の言葉だった。

守ってやるよ、その笑顔。だって、きつと・・・あのとき、初めて唯那に会った瞬間に誓っていたんだ、自分自身に。唯那を守って・・・。

第七話

蓮と健太が戻ってきた。

唯那は健太に駆け寄る。

健太の顔はここに来たときとは打って変わって、すっきりしていた。何か吹っ切れたようにも思える。

「蓮と何、話したの？」

その変わり様に驚いて、先ほどの疑問を唯那は聞くが、健太は、「男同士の約束。」

と言うだけで、内容までは教えてくれない。だけど、

「もう、俺は止めないから。好きなだけ来るといいよ。」などと言うから、ますます会話の内容が気になる唯那だった。

だけど、そう言った健太の表情は、寂しげで、しかしとても優しくった。向けられた優しさが、唯那のためのものだと思うと、かすかなくすぐったさを覚える。それは決して不快なものではなく、むしろ・・・。

「ありがとう・・・！」

唯那は感謝の気持ちを込めて、健太へ笑顔を向ける。その笑顔がほんの少し、本人も気付かないくらい、はにかんだものになったことに気付いたものはなかった。

唯那を置いてひとり先に帰って来た健太は、思う。

気になるのは、『あと少し』という言葉。

唯那が悲しむことにならなければいいが・・・。

きつと蓮と笑い合っているだろう唯那を想って、健太はひとり家路

についた。

「じゃあ、行ってくるね。」

「気を付けてな？」

蓮と健太が会ってから変わったこと。

それは、唯那が蓮のもとへ行く前に、必ず健太にその旨を告げるようになったこと。

あの一件で、どれだけ健太が唯那を心配してくれたのか、知ったから。ちゃんと帰ってくるよという意味を込め、唯那は「行ってきた。」と言う。

だけど、そうは思っても、蓮のそばにずっといたいという気持ちが日に日に増していく。

蓮と会えた瞬間が一番うれしい。そのあとのマコとコマを交えたおしゃべりもとても楽しくて。

そうして過ごした時間の終わりが近づくと、唯那の心にするりと不安が忍び込む。

「でね、今日は千由紀ちゃんと健太が、授業中なのに喧嘩しちゃって大変だったんだよ？」

そう言った唯那は、その時の光景を思い出したのかクスクス笑う。

「そんなことがあったのですか。授業とは学問を習うことですよね？ 静かにしていなければいけないのでしょうか？」

「うん。先生すごく怒ってたよ！」

「健太殿はもつと落ち着いたしっかりした方だと思っていました。」
そんなに元気な方なのですね。そう言って笑う。

蓮の笑顔を見ながら、そう言えば、結局、蓮にも健太と何を話したのか教えてもらえなかったんだっけと唯那は思う。しかし、それはすぐに霧散して、

「そうだ！まだ蓮のお社、全部見たことなかったんだ。見てもいい？」

「おや、もうここに来るようになって随分たつのに、案内していませんでしたね。じゃあ、行きましようか。」

「うん！」

唯那がいつもいるところが本殿、そこから奥へ部屋が続く。蓮と健太が話した部屋は、本殿から3番目の部屋だ。その後ろに水回りがあり、そこから左へ進むとコマとマコの部屋がそれぞれあり、反対側、右に進むと、蓮の寝室がある。

唯那は蓮の説明を聞きながら、一つ一つ部屋を見て回る。

「ここは何の部屋？」

唯那が聞いたのは、蓮の部屋の隣に存在する部屋だ。見れば、寝台には美しい掛布が敷かれている。その部屋はどこか女性を思わせる雰囲気を出していた。

まだ、蓮たちの他にも人が居たのだろうかと思唯那は思う。

唯那からの質問に「あ。」と、蓮は思った。唯那と出会ってからこの部屋の存在を忘れていた。

そこは、かつての捧げもの、少女たちの部屋だった。使われなくなつて久しく経つ。

もうきつとここを使うものはないのだろうと思ひながら、掃除は欠かさず行っていた。

だけど、わざわざそのことを唯那に告げる必要はないと思う。

唯那は知らないのだから。かつて捧げものとされた少女たちがいたことを。

知る必要はないのだと思う。唯那はその伝承とは全く関わりのない『個』の存在。伝承を引き継いでいるのは健太だ。

だから、蓮は口を閉ざし、

「もう使っていない部屋ですから。」

そう唯那に告げて、わずかに微笑んでみせる。

「？」

蓮の様子に、言葉に疑問を抱く。だって、その部屋には色濃く残る、女性の気配。

しかし、蓮の微笑みには何も聞いてくれるなという雰囲気がある。心に生まれたもやもやをどうすることも出来ないまま、唯那はそこを後にした。

その日の帰り、初めのころから感じていたわずかな不安が、大きくなるのを唯那は感じた。ちくりと不安が胸を刺す。一步、唯那の世界へ近づくことにその痛みは強くなる。

（どうして、不安になるのだろう、胸が痛いのだろう……。）
それでも唯那の足は自らの属する世界へと歩みを止めることはない。
（ああ、きつと怖いからだ。）

唄が鳴り響く。唯那の心の中で。

『行きはよいよい』

そつだ、行くのは楽しみ。嬉しい。あなたに逢いに行くのだから。

『帰りはこわい』

さよならは悲しいから。辛いから。

また逢えるなんて保証はどこにあるの？

ずきりと鋭い痛みが胸を刺す。痛い！胸が張り裂けそう。あなたを置いて帰らなければならなんて。じゃあいいじゃない。帰らなくたって。心の中でひとりの唯那は甘く囁く。

・・・だけど、帰らなくちゃいけないの。唯那の脳裏に、ひとつの像が結ばれる。そう、私が帰るのを待っている人がいるのだから。

第八話

ねえ、蓮。帰りたくないよ。不安があるの、たぶん最初のころからあったんだ。それが最近すごく大きく膨らんでいく気がするの。だんだんね、帰るとき苦しくなるの。心が千切れるみたいに、ギュって苦しいの。でね、怖いんだ。だって、帰ってしまったら、もうここに来られないかもしれないんだよ？蓮に逢えないのがすごく怖い。それからね、何かが無くなっちゃうような気がするの。そのうち、心が痛いのを拒否して、ダメになっちゃう気がする。だから、帰りたくない。ずっと、ここにいたいって思う。

でもね、帰らなくちゃいけないの……。健太が待ってるから。すごく心配してくれたから、もう心配かけないように。

ここにいたいのに帰りたいなんて、我儘なのかなあ？

最近、唯那の様子が変わったと思っていた。それは、唯那の心がこちらに染まり過ぎてきていることだからだと蓮は知っている。唯那が蓮に心を寄せている。これはそういうことだ。それは蓮にとってうれしいことであるはずだった。想われているのだから……。

しかし、今日の帰り際、唯那が漏らした不安と心の苦しさ。『蓮に逢えないことが怖い』それは初めて唯那が口にした、唯那の蓮への想いの強さ。だが、その告白は、唯那が抱える苦しさの大きさも同時に伝え、蓮の心も重くした。

だけど……、

どんなに唯那の心が引き裂け、そのことで唯那が苦しむことを知っていても、蓮は言えないのだ。

唯那は、自分が我儘なのではないかと言っていたが、本当に我儘なのは自分だ。唯那が蓮の我儘に振り回されているのだ。

「もう来てはいけない。来るな。」とは、どうしても蓮には言えない。

同じように、唯那をこちらに留まらせることも。

唯那を想う少年と約束したから。

ここはもうすぐ無くなる。

唯那をその日までこの地に留め置くことは簡単だ。

そうすれば、少なくとも唯那の心の痛みは取り除けるに違いない。痛みの原因は、ふたつの世界に心が残っていることだから。

だが、そうしてしまったら、唯那の心はこちらに染まり、終焉の日にあちらへ戻ることは出来なくなる。そして、心も壊れてしまうだろう。

さらに、体はただの人でしかない唯那は、崩壊には耐えられない。

それは、すなわち、唯那の消滅を意味する。

それだけは避けたかった。たとえ、蓮の手が届かない場所だとしても・・・

唯那に生きていて欲しい。笑って、幸せに。

そんな言葉に出来ない蓮の想いをあの少年は、健太は理解してくれた。

あと少し。

唯那の心の限界が先か。この地の終焉が先か。

いずれにしろ、残された時間はあと少し。

それは、どれだけの時間だろうか？いや、どれだけであっても、きつと短いのだ。

どうにもならない想いを胸に、蓮は静かに目を瞑った・・・。

その日、いつものように蓮に会いに行くために細道を訪れた唯那は、その場所に立て札があることに気付いた。

（あれ？こないだ来た時にはなかったのに。）

漠然とした不安が、唯那の胸に広がった。そこに書かれている文字を目で追う。

「う・そ・そ・っ！」

読み終え、頭が内容を理解していくと同時に唯那の顔から血の気が引いていった。

青ざめた顔の唯那が、何かとても焦った様子で、健太のもとへとんできた。その時健太は部活中であつたが、蓮のもとへ行つたと思つていた唯那が、血相を変えて健太を呼んだので、先輩達に断りを入れてから唯那のもとへ駆け寄つた。

「どうかしたのか？」という健太の問いにも、「とにかく一緒に来て！」と言うだけで、はつきりしなかつた。ただ唯那がとても焦っていることは健太にもわかつた。健太は先輩に早退する旨を告げ、唯那の様子に何かを感じていた先輩達も健太に早く行くよう促した。

唯那に連れて行かれた先はあの細道だつた。

「これっ！見て！」

唯那が示したものを見て、健太は愕然とした。

道路および区画整理に伴う工事について

着工日 XXXX年。月 日

社および周家の取り壊し、道路整備を行います。

危険ですので、工事の間は近づかないようお願いします。

「これは・・・。」

健太は呆然とつぶやく。

「ねえ、これって、蓮の居場所が無くなっちゃうってことだよね・・・？」

不安げに唯那が言う。その言葉に健太ははっとした。

「ああ、・・・たぶんそういうことになると思う。」

痛ましげな表情を浮かべ、健太は唯那の言を肯定する。

「蓮は、知ってるのかな？！」

おそらく蓮は知っていた。でなければ、あんな意味深なことは言わなかっただろう・・・。「あと少しだけ」などと。知っていたからこそ、あんなに必死で、だからこそ「あと少し」だったのだ。限られた時間を唯那と過ごすために。

「きつと知っていたよ・・・。」

健太はそう言って唯那に寂しげに微笑む。

その表情を見て、唯那は理解した。

蓮は知っていた。そして、健太も知っていた。健太がいつ知ったのかといえば、それはあの日の二人の会話。唯那には決して教えてくれなかった、あのときの話だ。

「もう、・・・駄目・・・なんだよね？どうにもならないんだよね・・・？」

唯那たちはもう高校生だ。何も分からない子供ではない。

一度こうして掲示してしまった行政の判断を、それも期限が1週間後に迫っている工事を止めることなど出来ない。それも、たかが高校生の言い分だ。そんなものが通るわけがない。

「とにかくくつ、唯那、早く行ってこい！一人で平気か？」

「う、ん・・・！」

今にも泣き出しそうな唯那に健太は今、なすべきことを示す。

蓮のもとへ駆け出す唯那の背中を見ながら、健太は後悔の念を抱くあの日の帰り、「あと少し」という言葉が気になったのではなかったか。それにより、唯那が傷付かなければいいがと。なぜ、もっと深く考えようとしなかったのだろう。

守ろうと思ったのに、唯那の心を。

ただ、こんな形で事実を知ることになった唯那の心の痛みを思うことしか、健太には出来なかった・・・。

工事の開始は一週間後。あと、一週間だ・・・。

第九話

「蓮、蓮っ！！」

唯那が蓮のもとに向って飛び込んでくる。

その眼には、こらえきれない涙が溢れていた。

「っ！どうしたのですか、唯那！」

唯那を受けとめながら、ただならぬ唯那の様子に息をのむ。

「なんでっ！教えてくれなかったの・・・！」

もうすぐ、無くなるんだってこと！

ああ、ついにこの日が来てしまった。出来ることなら、唯那が何も知らぬまま、ここを去れたら良いと思っていた。そうすれば、蓮が居なくなつた後の唯那を、きつと泣くだろう唯那を見なくて済むと思つたから。それは、蓮のエゴに過ぎないけれども。唯那が悲しむ様を見れば、離れがたく思つてしまう。現に今、離したくないと思つていてではないか。このままつなぎ止めたい。壊したくない。相反する気持ちで蓮の心を埋め尽くす。だから、出来ることなら唯那が何も知らぬまま・・・。もう叶わない願いを胸に抱き、唯那を抱く腕に力を込めた。

「細道のところに立て札があつたの・・・。あと一週間で、ここを壊すつて。」

立て札が・・・。いつ持ってきたのだろうか。蓮にはもう、分らない。自分の存在を忘れてしまった人達の気配を感じることは難しい。それほどまでに蓮の力は弱つてしまつたのだ。

「あと・・・一週間・・・。」

ぽつりと蓮は繰り返す。

思つたよりも短い。だが、唯那の心の限界より先で良かったとも思ふ。

なぜなら、その場合は蓮がそこに存在するのに、唯那を切り離さなくてはならないから。

ここが消えてしまうのであれば、蓮も別の場所へ移り、唯那とまみえることは、きっと二度とない。

そのほうが想いを引きずらずに済むと思う。どちらにしても、辛いことに変わりはないけれども・・・。

「唯那・・・、これからの日を毎日会いに来てくれませんか・・・？」

これくらいなら許されるだろうか。望んでもいいだろうか・・・？
なあ、健太殿。

「うん、うん・・・っ！絶対、毎日来るから・・・！」

別れを感じ、悲しむ唯那のその叫びは、どうしようもなく力強く、そして、温かく蓮の心に響いた。

怖い。

自分の家に、世界に帰るのがどうしようもなく怖い。
もうすぐここが壊される。

時間がないのだ。蓮と合える時間があと少ししかないのだ。

今帰ってしまったら、二度とこの世界に来られないのではないか？
そんな不安が唯那の心を埋め尽くす。悲しみに心が悲鳴を上げる。

蓮が好きだ。

分かっている。神と人とはともに生きていくことが出来ないものだと。

それでも唯那は惹かれてしまったのだ。

たぶんその気持ちは、初めて足を踏み入れたときから始まっていたのだろう。

水に映る赤。そこに美しくたたずむ蓮に、魅せられていたのだ。

帰るときに感じていたかすかな不安。

時を経るごとに膨らんでいった。

それはまた来る事が出来るのだろうかという不安。

蓮のそばから離れていかなければならないことが、怖かった。

もう二度と逢えなくなる日が、そこに迫っている。

蓮のそばに居たい。

ずっと蓮のそばに・・・。

・・・どうすれば蓮と離れずに済むのだろうか・・・？

その日、唯那が戻ったのはすでに日が暮れた後だった。

「！」

さすがにもう帰っただろうと思っていた健太がそこにいたので唯那は息を飲む。

「待っててくれたの・・・？」

「ああ、うん。きつと遅くなるだろうと思ったから。」

暗い中、一人で帰らせるわけにはいかないしな。と健太はつぶやく。きつとそれだけではない。落ち込んで帰ってくる唯那を心配してくれたのだ。現に真っ赤に目をはらした唯那を覗き込む目は心配であふれている。そんな健太の優しさに気付き、唯那は小さな声で「ありがとう。」と言った。

けれど、そんな健太の気遣いも今の唯那には無力で、考えるのは蓮のそばにいたいということだけ。今だって、帰りたくない駄々をこねる唯那は蓮に無理やり帰されたのだ。蓮の意思は固く、唯那が

何を言っても聞いてくれなかった。唯那が思うのは、ずっと蓮のそばに、ただそれだけだった。

翌日、学校へ着いた健太は、そこに唯那の姿があることにほっとした。もしかしたら、学校を休み、蓮の元へ行くのではないかと危惧していたのだ。昨日、戻ってきた唯那は目を真っ赤に泣き腫らし、健太が声をかけてもどこか上の空だった。それは今日も続いているらしく、千由紀の声にも「うん。」としか反応せず、心配したらしい千由紀にどうかしたのかと聞かれた。まさか、本当のことを言うわけにもいかず、

「昨日から少し具合が悪いみたいなんだ。」
と答えておいた。

その唯那から、放課後、声をかけられた。

「健太、お願いがあるの。私、学校休んで蓮の所へ行く。協力してくれる？」

唯那の目を見て思った。ああ、これは何を言っても聞かないと。だから、健太は「分かった。」と言うしかない。そうすることしか出来ない自分に不甲斐なさを感じながら。

唯那はずっと考えていた。だけど、考えても考えてもどうしたらいいのか分からない。ただただ、蓮の所に行きたい。そのことだけがぐるぐると頭の中を駆け回る。こんなにも授業に身が入らなかったのは初めてだ。本当は今日だって学校に来ている場合ではないと思っていた。だから、健太にお願いした。健太には迷惑を掛けるけれど、きつと唯那の欠席の理由を上手く誤魔化してくれるだろう。学校を休むことには引け目を感じるが、今はそれよりも蓮のことが大切だった。

刻一刻と容赦なく時は進んでいく。

核心には触れないまま、表面上は穏やかな日が過ぎていく。

蓮も唯那もその場の空気に白々しさを感じながらも、自らこの時間を手放すことを恐れて、雑談に花を咲かせる。

唯那の頭の片隅は、蓮と離れずに済む方法は本当にないのかと答えのでない問いを繰り返し、説いていた。そして、考えていて思い至ってしまった『蓮はどうなるのか』という恐ろしい問いが出来あがっていた。真剣に考えるにはあまりに恐ろしく、唯那はそのことについて、蓮に聞くことが出来ないまま、その数日が瞬く間に過ぎて行った。

工事の日が翌日へと迫ったその日の夕刻。

それまで現実から目を背けるようにしていた他愛のない話を区切り、蓮は姿勢を正し、真剣な面持ちで口を開く。

「明日は来てはいけません。いえ、来ないでください。」

硬い表情で蓮が言う。

「どうして!？」

「危険だからです。明日、この場所は崩れます。巻き添えを食って欲しくないのです。」

「ううん、危険だっていいの!蓮と一緒にいたいのに!」

「いいえ、駄目です。」

本音を言えば蓮とて明日も唯那に逢いたい。最後の瞬間まで唯那と共にいたい。しかし、それでは唯那を危険にさらすことになるのだ。それは蓮の望むところではない。

だから、

「さよならです。唯那。」

蓮は唯那を突き離れた。

唯那の様子が気になり、夕方、細道へ向かった健太は細道に座り込む唯那を見つけた。

「唯那・・・？どうかしたのか？」

健太の言葉にその背がぴくりと反応した。

「健・・・太？」

その声は弱弱しく響く。

「蓮に、『明日は来るな』って・・・もう、『さよなら』だって・・・」

ヒュウと唯那の喉が鳴り、嗚咽が混じる。

「それは・・・でも、明日が最後だろ・・・？」

確かに工事は明日だったはずだ。

こくりと唯那はうなずく。

「でもっ、危険だから駄目だって！・・・危なくたっていいの。蓮と一緒にいたいのに・・・」

そうか、蓮は唯那を危険にさらさないために。

「唄が聞こえないの。呼んでも声が聞こえないの。」

閉じたのか。

唯那の嘆きを、蓮の心中を思い、健太の心も重くなる。

見上げた空は、茜色に染まり、蓮の元にある大きな鳥居を思い起こさせる。

綺麗な色なのにとっても悲しい色だった――。

第十話

その場から動かない唯那をどうにか説き伏せ、家に送り届け、自らも自宅へ戻った健太は考える。

唯那がこのまま大人しく明日を過ごすとは思えなかった。必ずもう一度、蓮の所へ行こうとするはずだ。唯那のまじめな性格ではこの一週間もきつといつも学校へ行くのと同じ時間に家を出ていたに違いない。家族に心配をかけないために。

ならば、明日とてそれを違えることはないだろう。

そこまで考えると唯那が学校へ登校する時間から逆算し、家を出るであろう時間に見当を付ける。

その前までに唯那の家へ向かうことを誓って健太は眼を閉じた。

その夜は一睡も出来なかった。

はやる気持ちをどうにか押さえつけ、家族に心配を掛けないように振舞うが、隠しきれるものではなく「何かあるのか？」と母親に聞かれた。この数日も家族は唯那が普通に学校へ行っただと思っている。唯那が普段通りの時間に家を出ていたからだ。休む訳を聞かれても家族には説明しようがない。だから唯那は小さな嘘をついた。

今日は金曜日。学校は休みではない。いつもの時間に家を出なければいけないのだ。時間が経つのをこんなにもどかしく感じたことはない。

「いつてきます。」

ドアを開けた唯那は門の前に立つ健太を見て、息を飲む。

「どうして・・・？」というつぶやきが唯那の口から洩れる。

「唯那が心配だったからさ。行くんだろ？天神様。俺も一緒に行くよ。」

昨日の様子を見られていたのだから健太の心配はもつともだった。

それにしても、蓮の所に行っているのを言い当てたときといい、健太には自分の行動がお見通しなんだなと唯那は思う。そんな健太の存在を少しだけ心強く感じながら、唯那は蓮の元へと足を速めた。

二人は無言のまま【細道】へと辿り着いた。しかし、

「やっぱり聞こえない・・・。」

閉じられた入り口を唯那は見つけることが出来ない。

うなだれる唯那を見て、最後にもう一度蓮に逢わせてやりたいという気持ちが健太の中に沸き起こる。どうにかならないのかと健太は懸命に耳を澄ました。

さらさらと笹の葉が擦れる音。

「！」

ぴくりと健太の耳がそれをとらえた。

「こつちだ！！」

唯那の手を引き、健太は走った。

健太を伴って現れた唯那に蓮は瞠目する。道は閉じたはずだ。いったいどうやって・・・いや、健太だ。健太の存在を忘れていた。唯那に向かって閉じた道。他の人ならばあるいは・・・いや、そんなことはどうでもいい。問題はこの危険な場所に唯那が来てしまったという事実。もう時間がない。蓮は声を荒げる。

「あれほど来るなといったのになぜ来たのですか！もう、さよならだと言ったのに・・・っ。」

早く、早くしなければ。

「嫌っ！さよならなんて。もう会えないなんて！一緒に――」

唯那は蓮に縋りつく。

「いい駄目です！」

唯那の言葉を最後まで言わせず、蓮は強く拒否する。

そして、唯那とともに、再びやってきた健太を蓮はじつと見つめた。そこに宿る想いを健太は知っている。

その強いまなざしに向かって一つ、強くうなずいた。

ドッ ドーンッ

大きな地鳴りとともに地面が揺れた。

突然の衝撃に唯那も健太もバランスを崩す。

崩壊が始まったことを蓮は正確に理解した。

「ここはもう崩れます！さあ、崩れる前に！早く！」

「蓮は？！蓮はどうなるの？」

「私は、他の場所へ移ります。大丈夫。私は神です。死は訪れませ
ん。」

唯那を安心させるよう、あえて穏やかな口調で蓮は言う。そう、蓮は消えなかった神だった。だが、唯那がいて、健太がいる。ひとりでも覚えていてくれる人が居るのなら・・・蓮は消えない。

「コマ！マコ！ふたりを出口へ！」

「はいっ、さあ、早くこちらへ！」

「いくぞ――！」

唯那の手を健太がグイと引っ張っていく。

「いやよ！蓮と離れたくないっ、いやっ！」

叫ぶ唯那を悲しげに、寂しげに見つめる蓮の姿が、健太の目に映った。

絶対に唯那を連れて帰る。ここで失うわけにはいかない。あいつだつてそれを望まない。

——この手を離すわけには いかない

こわい！ 恐い！ 怖い！

唯那はただ、怖かった。どうしようもなく怖かった。

何が怖かった？ この温かな世界が崩れることが、無くなることが怖かった。

・・・蓮ともう二度と会えないことが怖かった。

ひとつだけ怖くないことがあった。

健太に引つ張られている手。

力強く、力強く、そして優しく・・・。

それだけが、唯那の支えだった。

どうかこの手を離さないで！

強く願った。

一筋の光が舞い込んだ・・・。

「おいっ！ お前たちどこから入った！」

唯那と健太の目の前には、作業服を来た町長、それに工事関係者。

「危ないから早く出て行きなさい！」

細道と小さな社はもうほとんどなくなっていた。

ガサッ

「戻りました。」

「ふたりは・・・？」

「無事に。」

「そうか・・・。」

私の唯那。人々の心から忘れ去られようとしていた私を見つけてくれた。

唯那。愛し子よ、どうか幸せに・・・。

蓮はもうほとんど崩れてしまったその地を切なげに見渡した。

そして、頭を一振りと言った。

「さあ、私たちも参ろうか。」

その地での思い出を、唯那との思い出を、唯那への想いを。断ち切るように・・・。

「はい。」

主人の想いに答えるように、二匹の守犬の返事が返った。

刹那、一筋の風が舞い込む。

その地にはもう何も、誰も残ってはいなかった。

エピソード

初めて唯那に逢ったとき、なんだか消えてしまいそうだと思った。だから、俺が守ってあげなくちゃって思ったんだ。いや、守るって誓ったんだ。

そのときはまだ、唯那の身に何が起きているのか知らなかった。事実を知ったとき、俺は嫉妬した。だから、無理やり一緒にいて行った。

だけど・・・そこにあつたのは、温かな世界。

それを知るまで俺の敵だった天神・蓮はおれに言った。

「唯那をこちらの世界に引き込むつもりはありません。私の力の限り、全力で帰しますから・・・だから、どうか唯那との逢瀬を。いまひと時の逢瀬を、許して下さい。」

俺が「もう行くな」と言ったときの唯那の泣きそうな顔。蓮と一緒にいるときの満面の笑顔。

仕方ない。守ってやるよ。その笑顔・・・。守るって誓ったんだからな。

あのことが起きるまで、俺はふたりを見守った。

蓮は言った。

「いまひと時の逢瀬」と。

蓮はいつから知っていたのだろうか。自分の社が壊されるということ。

。高校生の身分でしかない俺たちに、それを止める術はなかった・・・。

そして、あの工事の日。

蓮に「来るな」と言われても、唯那はそこに行こうとするだろうと思った。俺がどんなに止めても唯那が自分の意思を貫き通すだろうことは予想が出来た。

それならば、唯那に悔いが残らない様にしてやることしか俺には出来ない。

社が、あちらが崩壊してしまったら、もうこちらに戻ることは出来ないだろう。そしてたぶん、あちらでも生きてはいけない。

蓮に聞いたわけではない。唯那から聞いたわけでもない。

だけど、俺にはわかっていた。

頑ななまでに唯那を来させまいとする蓮の態度がそれを物語っていた。

蓮が望むのは唯那の生。

だから、

「俺も一緒に行くよ」

俺も行く。

蓮の望みを叶えるために。

そして、俺自身のために。

これだけは譲れない。

必ず唯那を連れて帰る！

.....

「健太！早く！こっち。」

どこかに駆けていったと思った唯那がおれを呼ぶ。

唯那のいる場所。

細い道。細道。

そうおれたちは暇を見つけては、探していた。

かの人がいる地を。

唯那のもとまでたどり着く。

それは、あの道に良く似た道だった。【細道】があった。

――。

風に乗り、かすかな音が鼓膜を揺すった気がした。
空耳か？

「健太っ、いま！」

唯那にも聞こえたようだ。

「うん、絶対そうだよ！」

うれしそうに唯那が微笑んだ。

「蓮、久しぶり〜！」

何も無い空間に向けて挨拶を言う唯那の、左手の薬指に光る指輪を
眩しげに俺は見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6321o/>

君に届く神の唄

2010年11月8日22時03分発行